

外国語活動

子どもたちの思いを実現する小学校外国語活動の単元開発

—「留学生交流会」を通して—

米 倉 智 久

Development of Units for Foreign Language Activities to Express Students' Ideas —Through a party with students studying abroad—

Tomohisa Yonekura

This study aims at developing lessons setting a goal of a party with students studying abroad and revealing the effectiveness and problems. In addition, this research also aims to examine how much ICT instruments are used and collaborative learning among students is developed. In this research, the researcher analyzed the observation of students' activities, the questionnaires and the content of description in worksheets and One Page Portfolio (OPP). One of the findings of this study is that children worked on the activities with awareness of the others and completed the tasks actively. Therefore, the finding suggests that this class development turned out to be effective. Although students were using ICT actively and cooperated with each other, the problem remained in terms of acquisition of accurate English expression. (p.141-146)

1 問題の所在と研究の目的

2013年12月に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が発表され、2020年度から小学校5・6年生で小学校英語が教科となり、3・4年生で外国語活動が実施される運びとなった¹⁾。これ以降、2016年8月には「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」が発表され、徐々に次期学習指導要領の全体像が見え始めてきた。そして、2016年12月の中央教育審議会答申が発表され、外国語に関して次のような提言がなされた。「外国語教育については、子供たちが将来どのような職業に就くとしても求められる、外国語で多様な人々とのコミュニケーションを図ることができる基礎的な力を育成する。国の高等学校卒業段階における英語力の成果指標を基に、国際的な基準であるCEFRのA2～B1レベル程度以上（英検準2級から2級程度以上）の高校生の割合を5割とする取組を進めて

きたことを踏まえつつ、小・中・高等学校を通じて一貫して育む領域別の目標を設定し、初等中等教育全体を見通して確実に育成する。」、「高学年において、現行の外国語活動(35単位時間)における「聞くこと」「話すこと」の活動に加え、「読むこと」「書くこと」を加えた領域を扱うためには、年間70単位時間程度の時数が必要である。」²⁾

このように大きな転換期を迎えている小学校外国語活動であるが、現在も多く的小学校では文部科学省から配布されている「Hi, friends! 1」「Hi, friends! 2」をベースにして単元が進められている。しかしながら、それでは子どもたちが自分自身の思いをつなぎながら学習を進めていく要素が薄いと感じる。柳瀬・小泉(2015)は、英語教育の現状について「現在の多くの授業で教えられているのは、『引用ゲーム』であり、自分の考えや気持ちとは関係なく、英語の内容に自分の責任を感じないままに、英語を引用するだけである。」と述べている³⁾。つ

まり、単なる「引用ゲーム」的实践が行われているにすぎない。大切なのは、子どもたちが意味のある内容をやり取りする場面が必要であると考え。

そこで本研究では、留学生交流会をゴールとした単元を開発し、その有効性や課題を明らかにすることを目的としている。また、自分が伝えたい内容の英語を獲得するために、ICT機器の利用や子どもたち同士の協働的な学びがどれほど促進されるか考察することも目的としている。

2 研究の方法

(1) 対象児

広島県内の小学校第5学年1クラスの子ども30人を対象に実践および調査を行った。

(2) 実践及び調査時期

2016年11～12月

(3) 単元の概要

①単元名 「おすすめのものを紹介しよう」

②単元目標

留学生に自分たちの「おすすめのもの」を紹介する活動を通して、好きな物や好きな場所を紹介する英語表現に慣れ親しませるとともに、進んで相手とコミュニケーションをはかろうとする態度を養う。

③単元の評価規準

[コミュニケーションへの関心・意欲・態度]

相手に伝えたい内容を進んで考えたり、積極的にコミュニケーションを取ったりしている。

[外国語への慣れ親しみ]

簡単な英語表現やジェスチャーなどを使って、自分たちのおすすめのものを相手に伝えることができる。

[言語や文化に関する気づき]

簡単な英語を使った文章を考える中で、日本語の語順と英語の語順には違いがあることに気づくことができる。

④単元構成

第1次	留学生と出会った場面の文章を作って練習しよう(2時間) ・留学生との出会いの場をイメージして、話す内容を考える。 ・出会った場面で使いたい英語表現を調べて、練習する。
第2次	「おすすめのもの」を紹介する文章を作って練習しよう(4時間) ・「おすすめのもの」を紹介する英語表現を調べて、発表の練習をする。 ・発表のリハーサルをして、内容の修正をする。
第3次	「おすすめのもの」を紹介しよう(2時間) ・留学生交流会で自分たちが伝えたい内容を紹介する。

(4) 検証の方法

子どもたちの活動の様子や振り返りカード、アンケート調査から考察する。

3 研究の実際

(1) 単元開発に際して

「留学生交流会」という新しい単元を開発するにあたって、その単元でどんな力を身につけたいのか子どもたちと話し合い、「英語やジェスチャーを使って、留学生さんとコミュニケーションを取ることができるようになる。」ことを単元の目標に掲げた。次に、単元の内容に関わって「留学生との交流会で何をしたいか」問うたところ、表1に示すような内容が出された。

表1 留学生交流会の活動アイデア

質問	名前, 出身国, 誕生日, 好きな色, 好きな食べ物, 好きな教科, 特技…
紹介	自分の名前, 年齢, 生年月日, 住んでいるところ, 好きなこと, 日本の食べ物, 日本の歴史, 日本の世界遺産, 日本の遊び, 伝統的な祭り…
体験	和楽器, 日本の伝統的な遊び…

さらに、これらのアイデアの中から希望するテーマを子どもたちが選び、最終的に表2の8つのグループに分かれて、それぞれに活動を行った。

表2 留学生交流会のテーマ

【日本の紹介】	【日本の遊び】
世界遺産	伝統的な遊び
日本食	すごろく
お祭り	外遊び（けいどろ）
日本の歴史	和楽器

(2) 授業の概要

ここでは、授業の具体的な内容と子どもたちの活動の様子や振り返りについて述べる。

①授業の実際 I <第1次2時>

1) 本時の役割

開発する単元自体が成立するためには、基本となる英語表現に慣れ親しむという外国語活動の評価の観点に沿うことが必要となってくる。そこで本時では、これまでに学習した英語表現を確認するとともに、ロール・プレイしながらそれらの英語表現に慣れ親しむことができるようにする。

2) 本時の目標

本や翻訳サイトなどで調べた英語でのあいさつや質問をロール・プレイしながら、使いたい英語表現に慣れ親しむことができる。

3) 活動の様子

導入場面では、これまでに学習した英語表現を確認したり復習したりして、交流会で身につけておくべき表現を意識できるようにした。具体的には、簡単な英語表現を使った自己紹介や質問を確認した。続いて学習課題の確認を行い、外国語係の子どもが本時の process を確認した。学習課題の追求場面では、まず留学生との出会いの場をイメージすることができるように、以下のようなデモンストレーションを行った。

A: Hi, I' m Tomohisa. Nice to meet you.
What' s your name?
B: I' m Johnson. Nice to meet you, too.
A: O.K. Johnson. Where are you from?
B: I' m from America.

その後、グループで簡単なあいさつや質問の英語表現を作り、グループ内で英語を話す練習を行った。どのグループもタブレット端末でインターネットに接続し、翻訳サイトを利用して自分たちが話したい言葉を英語に翻訳したり(図1)、再生機能を使ってその英語表現を確認したりしながら、練習を行っていた。

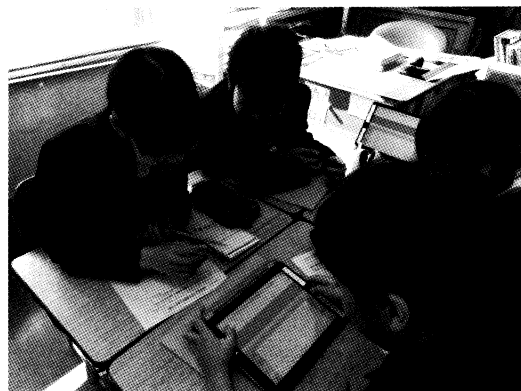


図1 翻訳サイトを利用している様子

グループ内での練習後、実践的なやり取りをする目的で、グループ同士でロール・プレイを行った(図2)。



図2 ロール・プレイの様子

A児の振り返りには、「場面を想像しながら、自分たちと留学生さんとのコミュニケーションの仕方を考えて、言葉を班で調べた。実際に英語を使って友だちとも話した。実際に友だちと英語で会話することで、他に何の英語を知らないといけないのかよく分かった。状況に合わせて使う英語も変えないといけないと思った。」とあり、目標に沿った振り返りだけでなく、状況に合わせた英語表現の違いにも言及していた。

②授業の実際Ⅱ <第2次1～2時>

1) 本時の役割

開発する単元では、グループごとに内容を深めていく時間を設定している。本時では、グループごとに様々なツールを用いて英語表現を獲得し、それらの英語表現に慣れ親しむ活動となる。

2) 本時の目標

「おすすめのもの」を紹介するロール・プレイを通して、使いたい英語表現に慣れ親しむことができる。

3) 活動の様子

まず、どのグループにも共通して使える表現を確認し、簡単なデモンストレーションを行いながら、それぞれ英語表現に慣れ親しんだ(図3)。

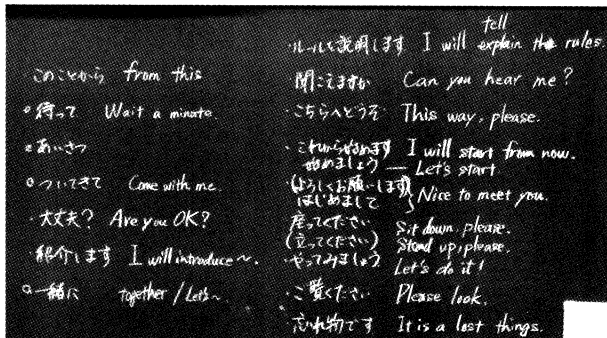


図3 共通して使える表現

次に、学習課題を確認し、第1次2時同様、グループの活動場面をイメージして、そこで使いたい英語表現を調べて練習を行った。今回は、タブレット端末だけではなく電子辞書を持参し発音を確認する子どもの姿も見られた(図4)。

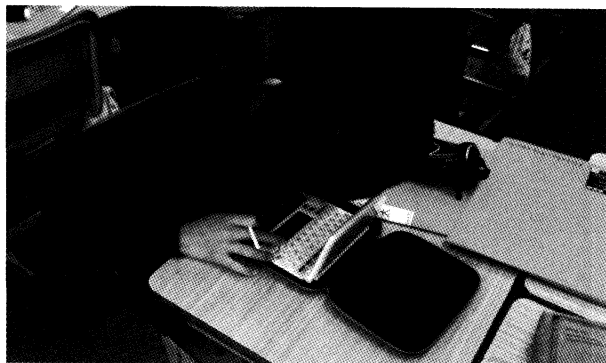


図4 電子辞書で発音を確認している様子

B児の振り返りには、「英語を調べることでだけでなく、練習をして発音することを進んでできた。また、全員で協力して話し合うことができた。」とあり、前時は調べることに終始してしまっていたが、その反省を生かして本時に取り組むことができたことを記述していた。

③授業の実際Ⅲ <第2次4時>

1) 本時の役割

開発する単元のゴールである留学生交流会を控えて、本時ではグループごとのリハーサルを設定し、「英語やジェスチャーを使って、留学生さんとコミュニケーションを取ることができるようになる。」という単元の目標に接近できるようにした。

2) 本時の目標

交流会のリハーサルを通して、自分たちが伝えたい内容を英語やジェスチャーで表現することができるようになる。

3) 活動の様子

各グループ7分間という時間を設定してリハーサルを行った(図5)。



図5 リハーサルの様子(和楽器チーム)

その際、グループ同士でリハーサルを相互に参観し、他のグループの発表の工夫や説明の仕方などを学んだり、アドバイスをしたりしてより良い発表になるようにした。子どもたちのアドバイスの中には、「ジェスチャーを交えて説明した方が分かりやすいよ。」、「相手の目を見ながら説明した方がいいよ。」など、非言語コミュニケーションに関する指摘があった。

4 結果と考察

留学生交流会の準備段階までを前項で紹介したが、開発した単元の有効性を子どもたちの活動の様子や振り返りカード、アンケート調査から考察する。

まず、本単元を通して、子どもたちがどういった英語表現を調べたのか紹介する（図6、図7）。

日本語	English
〇〇を紹介	I will introduce 〇〇
こちらへどうぞ	This way please
これから始めます	I will start from now
始めましょう	Let's start
よろしくお話しします。→ はじめました	Nice to meet you
座ってください	Please sit down
立ってください	stand up please
やってみましょう!	Let's do it!
見てください	Please look
一緒に思い出を作りましょう	Let's make memories together
楽しみにしていました	I was looking forward
聞こえますか	Can you hear me?
忘れ物です	It is a last things
このことから	from this

図6 A児のワークシート

使いたい英語表現	使いたい英語表現
お先: どうぞ After you	何?: let's go
日本語話せませんか: Do you speak Japanese?	お願いして: please
動かないで: Do not move	ちなみに: Like wise
楽しんでください: I have fun	源へ: Welcome to Mihara
来てくれてうれしいです: I am glad you came	
やめてください: Stop it	
いいよ: ok	
はい: Yes	
自分から挨拶: Greeting you self	
好きなのは: What I like is	
この魚は何?: Octopus is fanous	
担任: 米倉先生です: My homeroom teacher	
教えてください: please tell me	
聞いていいですか: Do you kind ask me	
家族何人ですか: How many people in your	
お寿司好きですか: Do you like sushi	
気をつけてください: Please be careful	
静かにして: keep quiet	

図7 C児のワークシート

2名の子どもたちのワークシートからは、「一緒に思い出を作りましょう。」や「来てくれて嬉しいです。」など、留学生との交流の場面を具体的にイメージして、相手意識をもった言葉を調べていることが分かる。冒頭で述べた「引用ゲーム」的な発想は子どもたちにはなく、自分たちの思いを伝えようとして英語表現を調べていることが伺える。

次に、言葉の獲得観点から、子どもたちが英語表現を調べるために使った様々なツールに関して、その利用状況を表3にまとめた。

表3 ツールの利用状況

タブレット端末（翻訳サイト）	30名
英和・和英辞典（紙）	17名
電子辞書	10名
先生	6名
その他	1名

単元の初めは、Picture Dictionary等の書籍とグループに1台のタブレット端末（翻訳サイト）しか紹介していなかったが、子どもたちから電子辞書や英和・和英辞典を利用したいという希望があり、他のツールを利用した子どもが増えた。このことから、自分で新しい言語（ここでは英語）を獲得したいという意欲が伺える。

さらに、それぞれのツールに関して、子どもたちが感じた長所や短所を表4にまとめた。

表4 各ツールの長所や短所

ツール	長所	短所
翻訳サイト	<ul style="list-style-type: none"> ・検索してすぐに英語が出た。 ・発音に気をつけて練習できる。 ・読み上げるスピードが変わって、分かりやすかった。 ・文章をそのまま訳せてすぐに分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本当に、この英語で合っているのか分からない。 ・調べた言葉が他のツールで調べたものと違っていることがあった。
英和・和英辞典	<ul style="list-style-type: none"> ・カタカナで読み方が書いてあって、分かりやすかった。 ・正確なものが載っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調べるのに時間がかかる。

電子辞書	・単語を入れると例文まで出てくる。 ・音声が開ける。	・長文で調べると出てこない。
書籍	・項目ごとにまとめてあるので、調べやすい。 ・翻訳サイトにない表現も載っていた。	・発音が分からない。

子どもたちが英語表現を調べる活動の中で、「翻訳サイトの結果が正しいとは限らないよ。」という声掛けはしていたものの、ほとんどの子どもたちは翻訳サイトの検索結果を信じて書き写していた。しかし、違うツールで調べた結果との違いを示したことで、出てきた結果を鵜呑みにせず、さらに確認しようとする姿が見られ、図らずもメディア・リテラシーを育むことにもつながった。

今後、分からない言葉を調べるときにどのツールを使用したいかについて調査した結果を表5にまとめた。

表5 今後使いたいツール

タブレット端末（翻訳サイト）	7名
英和・和英辞典（紙）	16名
電子辞書	19名
先生	2名
その他	2名

前述の通り、「翻訳サイトではその英語表現が本当に正しいかどうか分からない」、「調べた言葉が違っていた」、という経験をしてきた。子どもたちは、正しい英語表現を使いたいという願いをもって、英和・和英辞典や電子辞書を使ってみたいという子どもが増えてきたことが伺えた。子どもたちが言葉に関心をもって学習を進めていく姿が見られた。

5 成果と展望

本研究では、留学生交流会というプロジェクトを外国語活動の1つの単元として開発した。研究の第1の目的は、その有効性や課題を明らかにすること

であったが、自分が相手に伝えたい英語を調べて、それを使ってコミュニケーションを取ろうとする姿が見られたことで、ある一定の効果があったと考える。第2の目的である「自分が伝えたい内容の英語を獲得するために、ICT機器の利用や子どもたち同士の協働的な学びがどれほど促進されるか」については、ICT機器を積極的に利用したり、友だちと協力して活動したりする姿が見られ、こちらも概ね達成できた。しかしながら、子どもたちの中には、オンライン辞書の検索結果だけを信じて分かったつもりになっている様子も見られ、正確な英語表現を身につけるという意味で、今後活動内容の修正が必要である。

将来の展望としては、第6学年の修学旅行（京都・奈良）において、子どもたちが簡単な英語を使って外国人観光客とコミュニケーション活動を行えるようにしたい。その活動を通して、言葉が伝わる楽しさや上手く伝わらなかったもどかしさを感じ、相手と心を通わせる道具としての英語の大切さ、ならびにこれから先も英語を意欲的に学び続けようとする心情を養いたい。

<引用・参考文献>

- 1) 文部科学省：「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」、2013。
- 2) 中央教育審議会：「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）【概要】」、p. 15, 2016。
- 3) 柳瀬陽介・小泉清裕：「小学校からの英語教育をどうするか」、岩波ブックレット, No. 922, p. 6, 2015, 岩波書店。